

特集：医師国家試験にむけて

平成22年12月10日発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動委員会

巻頭言

医師国家試験にむけて

教務委員長 奥田 誠也（内科学講座 腎臓内科部門、教授）

資格試験は数々ありますが、医師国家試験はそのなかでも最もランクの高い試験です。そのため3日間の長い時間を使って力を試されます。つらい関門ですが、これからの自分の夢の実現や、人生の中心をなす仕事に就くには、どうしても突破しなければなりません。

この医学教育ニュースが皆さんの手に届いている頃は、総合試験の結果が出て卒業判定が終わっている時期かもしれません。現時点では最終判定はまだですが、例年に比して苦戦を強いられているようです。

毎年、国家試験の合格率を上げるにはどうするかについて教務委員会で話し合いますが、久留米の学生の、総合試験後の中だるみが話題になります。試験を終えて、一旦羽をのばし、もう一踏ん張りする前にずるずるとクリスマスと正月休みに突入し、気づいたら1月、せっかく卒試までに蓄えていた知識もいささか朧になっているという6年生が少なからずいるようです。この卒業試験後の時期の緩みを最小限にして、新たに気力を国家試験にむけて集中してもらうよう、この号の国家試験応援の医学教育ニュースも例年より早く企画されたものと思います。とくに卒業試験で十分な成績を挙げられなかった学生ほど、まだ国家試験準備に手がついていないかもしれません。あと60日、まだ大丈夫です、準備には十分な時間です。落ち着いて日々の積み重ねを行ってください。ご存知のように、大学別の国家試験の成績は、テコムの模擬試験などと違い、平均点ではな

く合格率で出されます。国家試験の合格率をあげるには、総合試験で好成績を遂げられなかった6年生にこれから頑張ってもらわなければなりません。昨年は、総合試験で90番台だった8名のうち7名が合格しています。総合試験後の頑張りがいかに大事かが分かります。

それに加えてこれから大切なのは「結束力」と「体力」です。結束力の強いと感じられる学年は合格率が高いと言われています。これは同級生に教えること、教えられることが、詰め込んで勉強するよりはるかに効率よく学習でき、こういった雰囲気全体を押し上げるものと思います。今度の6年生は結束力が強いということですが、けっして孤立することなくできるだけ勉強室にとどまってください。次に体力です。暗記するには体力が必要ですが、それにも限界があります。いくら勉強しても直前に詰め込む量は変わりません。最後に詰め込む知識以外は暗記と理解を繰り返し、教えあいましょう。集中力を要求される3日間の国家試験には精神的な体力も重要です。規則正しい生活をこころがけ、必ず1日1回は友達との会話で心の休憩をしましょう。

勉強、勉強の毎日ですが、学生時代の最後で最大の目標に向かって邁進した日々はかけがえない思い出となります。来年の国家試験の発表は3月18日で例年より10日余り早まりましたので、3月25日の卒業式には結果が判明しています。全員そろって、合格の喜びを胸に卒業式を迎えたいと願っています。

Heaven helps those who help themselves !

神代 龍吉（医学教育学、教授）

第105回医師国家試験が近づいてきました。

今年の6年生はまとまりがよく、期待は大きく膨

らみます。これまで6年間、努力してきたことを素直に結果に反映して欲しい。試験の日まで平常心を持って臨めばきっとうまくいきます。

去年の第104回国試問題の正解率を眺めてみると(図1)、500問中198問は受験者の90%以上が正答した問題でした。受験者の80%以上が正答した問題が96問、70%以上が正答した問題が65問、すなわち7割以上の受験者が正答できる問題が500問のうち359問(71.8%)を占めています。正答率が50%未満の問題は49問(10%)しかありません。国試はその範囲が広いのですべての分野においてまんべんなく得点するのが大変でしょうが、問題の多くは素直に考えれば正解に至るものと考えてもらいたい。難しいと感じた問題はだれでも誤答するものだ、とも考えていいだろう。問題の多くは「易しい」のです。

図2は去年の本学総合試験の正答率を示していますが、おおよそ国試の正答率分布に似ています。したがって総合試験も「易しい」のです。総合試験に合格するかどうか、つまり卒業できるかどうか、気をもんで勉強に手が付かない、という時期は作らないで欲しい。

試験当日は出発式があり、学長の訓示を受け、その後みんなで篠山神社に詣でて必勝を祈願します。西鉄グランドホテルには、精神科医と内科医が一人ずつ待機・宿泊してくれていて、不安・不眠・体調不良があれば気軽に携帯電話で医師に相談できます。薬も沢山あります。このように態勢は整っているのです、学生さんは平静な心で迷いなく試験に臨んで欲しい。Heaven helps those who help themselves (天は自らを助くるものを助く)。

第104回 医師国家試験の正答率(問題数は500問)

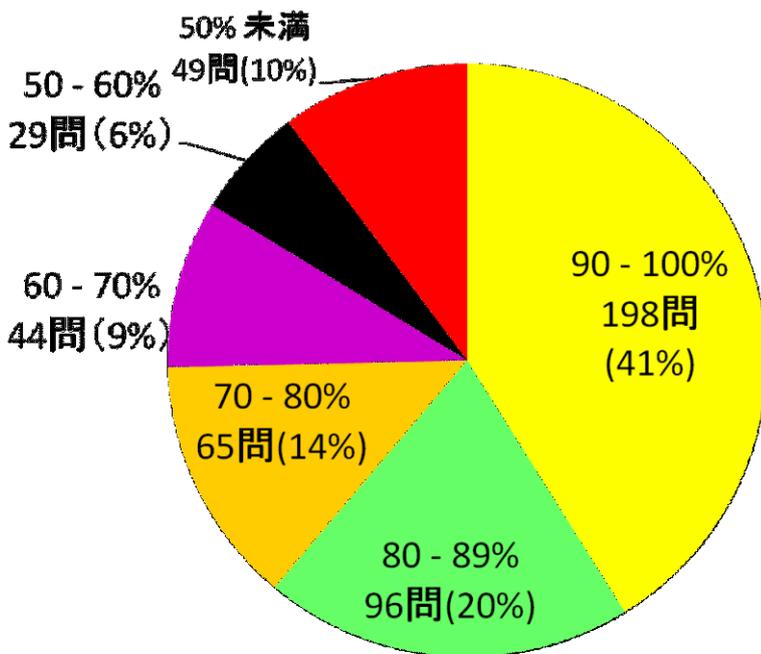


図 1

平成21年度 久留米大学
卒業試験の正答率
(問題数は500問)

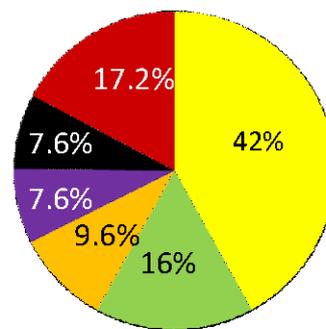


図 2

6年生のみなさんへ

藤澤 宏亘(初期臨床研修医)

卒業試験、お疲れ様でした。例年通り緊張感から解放され問題集も参考書も放り投げて遊び回っていることと思います。緊張続きでは心が折れてしまうので、この期間は個人的にはすごく重要な期間だと思っています。大いに遊んでくださ

い！そして切り替えてください。嫌なことを思い出させますが、みなさんはまだ受験生なんです。大学生活で今年ほど毎日勉強してきたことはなかったですよ？大量の知識を蓄え、去年とは比較にならないくらい頭がよくなったと思います。

それは、みなさんがそれだけの勉強習慣をつくってきたからです。人は（特に久留米大生の場合）楽な環境に適応することに長けていますが、その環境から抜け出すのは大変な労力が必要です。卒試前まで当たり前のようにはやっていたはずの「1日の大半の時間、机の前に座っておく」と考えてください。吐き気が起こりませんか？私なら起こります。（麻雀でもしておくなら別ですが・・・）6年生の味方、三苦大先生も仰っていましたが、この吐き気期間は休んだ日数に比例します。それに加え、休んだ日数分知識が抜けている気がします。もしも周りのみんなより遅れて勉強を再開すると・・・時間もなくて知識も大量に抜けているので、焦ります。焦ると何も頭に入りません。また焦ります。大失敗してしまいます。来年後輩の視線を気にしながら一からビデオ講義を観ると考えただけでEDになりませんか？私

は断じてEDにはなりません。・・・では、具体的にどうしたらいいか？友人と連絡を取り合うこと、そして勉強会室の前を通ることです。言われなくても勉強を再開する人たちがいます。で、徐々に電気のついていない部屋が増えていきます。1/3の部屋で電気がついていたら始めましょう！卒業試験をクリアしたとき、みなさん国試合格の実力が備わっていたので特別新しいことはしなくていいです。ただみんなと同じ事を（自分は危ないと思っている人はみんなの倍）やれば合格できるようになっていきます。あとたったの2ヶ月です。この1年間を無駄にしないように受験生ということをもう一度思い出して頑張ってください。最後になりますが、ドクターになるとつらいこと、楽しいことがたくさん待っています。来年度から研修医として一緒に働けることを楽しみにしています。

海外研修

「第8回マレーシア生理学クイズ大会体験記」

姉川 英志、堀川 剛、中島 祥晴（医学科4年）

生理学教室の石松准教授から話を聞いた時には全て英語での勉強ということで迷いもありましたが、またとないチャンスだと思い、出場する決意をいたしました。生理学のクイズ大会に出場するにあたって、私たちは「ギャノン」英語版の巻末の問題を出場する学生3人で分担して解き、互いに確認しあうという勉強方法をとりました。

生理学は既に2学年の時に学習していましたが、勉強を開始した7月当初は問題を一問解くのにもかなりの時間を要することが多々ありました。それでも何とか9月後半までにはある程度全体的に生理学の範囲を英語で勉強することができました。

連日の勉強は大変ながらも友人とともに一生懸命に頑張れたことは大変有意義な時間を過ごすことができましたし、今では良い思い出となっています。

大会は2010年9月24日の筆記試験（予選）と25日の口頭試問によるトーナメント（本戦）の日程でMaraya大学にて開催されました。アジア・オセアニアとヨーロッパの一部の43チーム（16カ国）が一斉に集まりました。私たちにとって24日Maraya大学での大会初日は何もかもが新しい体験の連続でした。午後から筆記

試験があり、その夜には予選通過チームの発表がありました。結果は見事予選突破でした。みんなと大変緊張しながら発表を待ち、また久留米大学の名前が呼ばれた時には思わず歓喜の叫びとその半面ほっとした気持ちが押し寄せてきたことを今でも覚えています。

25日は本戦（口頭試問）です。結果から言いますと一回戦敗退でした。原因の一つとして考えられるのは言語の壁です。英会話もたどたどしい3人にとって英語での口頭試問には手も足も出ないといった状況でした。第二の原因としては医学教育です。海外の学生と交流をすると医学教育を英語でしていない国は日本ぐらいで、海外では授業からテキストまで全て英語でしている国が大半を占めていました。

結果は惨敗でしたが、世界各国の学生と交流出来たことはかけがえのない思い出となりました。それと同時に異文化にも触れることができ、この大会を通じて一段と広い視野を持って医学の勉強に励んでいこうと思えるようになったと感じています。このようなチャンスを与えていただいた生理学の石松准教授、ならびにお世話していただいた生理学教室の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

研究室体験実習

“now or never”

林 康平(医学科4年)

研究室体験実習というものを皆さんはご存じだろうか。カリキュラムブックの最後辺りにひっそりと載っているものなのだが、私はその中から1番興味があった形成外科で1週間ほど実習をさせて頂くことになった。実習内容はマイクロサージャリーといって、顕微鏡で3mm程の血管を繋ぐ実習だった。一通り、器具の説明を受け、先生の手技を見せて頂き、早速やってみる。ところがまず、針が持てない。針をやっとのことで持てても、モデルの血管に針を通せない。針を通せるようになる頃には血管壁はボロボロになっていた。しかし2日以降は次第に慣れてきて、最終日には初日に1本の血管を繋ぐのにかかった時間で、5・6本ぐらいいは繋ぐことができるようになった。最終日はラットに麻酔をかけ、皮膚を切開し大腿の血管を使って血管縫合を行ったのだが、モデルの血管と違い、血管の周囲に血液や筋肉があってそれらに血管がくっついてしまい予想以上にやりにくかったのに加え、血管壁を破ってしまうと元に戻らない。かといって、慎重にやりすぎると時間がかかるのでラットに負担がかかるのでよくない。やる前はできるだろうと自信を持って臨ん

だが本当に難しかった。最後は先生に手伝ってもらいながら、なんとか縫合することができた。こうして1週間と短い間だったが、私にとって、とても有意義な時間だった。なぜなら大学に入って初めて勉強したんだなという実感が残ったからだ。今までは、何の目的意識もなく、その場限りの試験に受かればいいやぐらいいの勉強とかほとんど作業をしていた。作業はやはり苦痛でしかなく、自分の中で限界を迎えていた。だが、4年生という折り返し地点に立つ前にゆっくりと心を落ち着かせて自身の将来についてしばらくの間、真剣に考えた結果、進むべき道を決めた。それからは、私にとってやらされていただけの講義、実習、試験も、全てというわけではないが今までに比べて真摯に勉強に取り組んでいる。少なくとも勉強が作業ではなくなった。だから、遠回りしたぶん、思うことがある。

“now or never”、今を大事に。気づくまでに時間はかかったが今まで勉強に対して悩んだこともこれからの私にとっては必要だったのかもしれない。

インフォメーション

PBL テュートリアル発表会	第1学年 平成23年1月11日(火)
	第3学年 平成23年1月20日(木)
第1学年 看護体験実習	平成23年2月21日(月)～2月25日(金)
第4学年 OSCE 試験	平成23年2月19日(土)
第5学年 総合試験	平成23年2月25日(金)、2月28日(月)
第5学年 advanced OSCE 試験	平成23年3月5日(土)
大学院医学研究科 学生募集(後期) 受付期間	平成23年1月17日(月)～1月28日(金)
第105回医師国家試験	平成23年2月12日(土)～2月14日(月)



◆編集後記◆

今年はいつよりも早く医師国家試験に向けての特集を組みました。かつて久留米大学は毎年最も多くの医師を輩出していました(昭和55年から平成元年までの10年間の累計で全国1位)。国家試験の合格率ばかりが注目される昨今ですが、2008年度(第102回)も115名で全国1位でした。久留米大学は優れた医療人の育成に取り組み、輩出しています。6年生の皆様、最後の追い込みです。国試完全制覇を祈念しています。

医学教育ニュースの内容をさらに充実させるために、皆様方の忌憚のないご意見等を広報活動委員会まで頂ければ、幸甚に存じます。

編集責任者： 廣松雄治 yuji@med.kurume-u.ac.jp (内科学、内分泌代謝内科部門)